



中村俊定文庫
文庫 18
674





ちり〜雪をこぼす

流る〜尾流の〜排ふた〜

みちえ記



あかりやあ〜は 柳也 雪も入る 雪もあまも雪〜と
雪〜もあ〜る 白子に〜と 雪も雪も〜 乃の法〜と
か〜るほど 八日の朝の〜と 雪に〜と 排跡水の〜と
踏ひ〜と 乃の雪 火苗に〜と 雪〜と 紙〜

雪火苗の〜の 雪も〜 膝〜

水〜と〜に 流る〜に 雪も〜 山吹よ〜も 村〜も

かゝる波辺のむらゝあけふは露の膝をやらあゝさ
節中もちうぬべー大子ゆかんぞ夢中たいてん
けふ侍のまの危がふそいけ家のつの子やう瓜昔
六日とたよる風うまへひきて髪ゆいであゝさうり
あど侍る是ハ折う折う二つふあゝさ後伽のせしれ
のあゝさうかくてあややちらーよまゝはほほもはうぬ
あゝさ海や尻輪車のうでう人ふもなりのみやほ
ういふもせーさべらん替へんや彩里一仏の真加
をから侍る尻う身のまゝこなうなるさゝらなと

なごて涙もむゆいさゝさゝら津あまなりのま
あやふ是のさういひゆる者ハ花藝の身ハ心
かゝる地へてあややちらん草やうんそん
おゝ宗後材をかく言さゝら一宗や露の樹
に花あまゝいふ山の鳥もさういふ吹さあゝさ
風ふ舞のまぬの張屋りやせんかあゝらあややん
て門中な中ーらそ後あゝさ一抱めて言さゝら
さゝらあゝらうんさゝらあゝらあゝらあゝら
あゝらあゝらあゝらあゝらあゝらあゝらあゝら

若穂もひろくておのせやたのこがけの
かたへ

秋やとや枝父の山小炭を焼

好き〜石ふ〜こ〜入間川 宗後

入間の那〜の宮塔子の井ま〜あ〜
名あり申昔小八園部六弥太比企判官熊谷
二郎川越太郎其もろ分所小姓〜も今
のや〜におもよせや

ぬる〜小八川越流うむ〜尾谷 宗後

尾〜家もあ〜く〜ゆ〜こ〜は〜山根の
さ〜毛呂の旗布りキマク檀家小法〜あ〜
洗シ是小あ〜あ〜あ〜押〜あ〜
侍〜娘子の買物〜あ〜い〜あ〜あ〜
あ〜入〜誰〜もみやげ〜あ〜あ〜
且向あ〜は〜書ハ長〜あ〜

武藏野小原公〜あ〜あ〜 崇北

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

九日あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

公箱の障子とひんてい

と掃くり危甲斐公障ふ茶茶のあ

と茶茶のあ色茶茶のあ茶茶のあ 茶茶

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

山の大成も茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ茶茶のあ

るるまゝふふハ福をかきこり 崇兆

遊く秋や酒のこぼる小舟まき 全

嬉々や藤正月のそとやまある 宗後

十日いふくくちる瓢の腹ふ命をたくし棘乃

實くそ茶菓中も似て秋や異しけし物たふ

名はき桂木山にのぼる 儿秋

温柿のてくくくくくくくく 宗後

かほくくくく先入口ふ柿をみち 宗後

奇石怪落さへてくくくくくくくく 宗後

ちちやのく腹哀猿杖をくくくくくくくく

人きくくく

おそくくくくくくくくくくくく 山の家

家ふるは戸の口くくくくくくくく 山

ちうくくくくくくくくくくくく 大成

富士も赤城も早くくくくくくくくくく 山

あつきの形ふひきをもてゆくとくくく 壺のまひら

かつぬ地がみふおくくくくくくくく 中城入間の川は企ふ

ほせし海なるハくくくくくくくくく 氏

澤古ふあて十にむらりやのまをゆ探集抄
中よりけりるむらりて十八日のまをむらり書
ぬりよらん

紀行一条贈極密之次強令梓行年蓋拙見之
野向就於當時之知已欲需介介者欲彼入道
及宗濟等可為本懐也非欲懇令替者弦哥
而已穴質

寛政六年寅初冬三日 榮兆訂校之

第八号

